MOUNTAIN

ヒルトゥス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＭＯＵＮＴＡＩＮ

【Ｎコード】
Ｎ７９３１Ｔ

【作者名】
ヒルトゥス

【あらすじ】
登山家サークルに所属する主人公は、山に魅せられた人間の一人だった。
彼の山との戦いが始まろうとしていた……。
※この作品はフィクションです。この作品に登場する団体、人物などは架　空であり、実在の団体、人物とは一切関係ありません。しかし、地名や　山などは　実在のものを用いています。

山岳（前書き）

頑張って書きました。
なんか長続きしそうです。
皆様に読んでもらえるよう、頑張ります。

山岳

山は、大きくて雄大で、神秘的で、人々から崇められた地であった。
その証拠に、ギリシャ神話の中心地はオリンポス山だし、山岳信仰の地やパワースポットとしても有名であったりする。
そして、名高い山ほど人々は魅せられる。それは今日の富士山やエヴェレスト山の登山者の量が証明している。
しかし、それは同時に、美しきこの山々を、汚してしまう。
これは、そんな美しき山々に魅せられた登山家の物語である。

２０１１年某日。
朝七時に目を覚ましたＸ（エックスレイ）は、外の空気を吸った後、荷造りを始めた。
今日は大阪府豊能郡能勢町と京都府南丹市にまたがる山、『深山』を登山する日だ。この山は、標高が７９０．５メートルもあり、大阪５０山の一つとなっている。
きちんと整理して、水分、昼食、救急キット、その他非常用グッズなどなど……をリュックサックに詰め込んだ。
そしてマウンテンバイクに乗り、街中を疾走する。

待ち合わせ場所についたＸは、マウンテンバイクから飛び降り、カギをしっかりかけた後で歩き始めた。集合場所はいつものカフェ。やはりまだ来ていない。そこでＸは、コーヒーを一杯頼んだ。
「あ、コーヒー一杯お願いします。で……ミルクと砂糖を多めで」
「はい、かしこまりました」
Ｘはコーヒーが来るまでの間、コツコツとテーブルをたたきながら考え事をしていた。遅いな、とかなんとかかんとか。
コーヒーが来た。彼はカップに手を伸ばし、コーヒーをすすった。

そして朝食がてら、ケーキを一つ頼んだ。
「チーズケーキを」
「以上でよろしいですか？」
「……」
「あの～、お客様……」
「え？　は、はい」
Xはぼうっとしていた。

それから2分後ぐらいに二人の人間がやってきた。それぞれFと（フォックストロット）Z（ズール）だ。
Fは席に座ると、
「ごめん、遅くなって」
と謝罪した。
Zは口を開き、
「ああ、すまない」
と謝罪した。
「いいんだよ。それより、深山は登れるよな？」
Xは聞いた。
「ああ。小学生が何人もいても登れる山だ。山頂には雨量観測所もある。大抵の人が登れる山だ」
Fは言った。
「そうか、なら大丈夫だな。そろそろ出ないか？　夕食までには帰らないと」
Xは立ち上がった。コーヒーとケーキの代金を支払い、出口へと向かう。

彼らは登山家サークル『永遠の世代（エターナル・ジェネレーション）』だ。年に一度開かれる『登山家総会』ではショボいサークルとしてさげすまれている。
「永遠どころかあと二か月で消えるんじゃないか？」
周りからはそういう目で見られていた。

場所は深山付近。
彼らは山に足を一歩踏み出した。
しかし、彼らは知らなかった。
自然の猛威を。
自然の強さを。
自然は人間を超えるということを。

山岳（後書き）

まだ全然話が進んでいませんが、これから書き進めるつもりです。頑張ります。

猛威（前書き）

二回目となりました。
頑張らせていただきます。

猛威

Ｘ（エックス）はＦの後ろ（ロオック）に続（ストロット）いて、足場の悪いルートを登っていた。何でわざわざ大変な方を登るのかは知らなかった。

「なんでしんどい方を登るんだ？」

Ｘはついに聞いた。

「こっちのほうが楽しいだろ」

Ｆが答えにならない答えを返す。

「それじゃ答えになってないんだよ」

Ｚ（ズール）が突っ込みを入れた。

「だって、何となくだし」

「……」

Ｆの適当なプランに、ＸとＺはつくづくあきれた。

ＺはＧＰＳみたいなのを使い、今の位置を教えてくれる。ちなみに、現時点では２００メートル分しか登っていない。

「あと５９０メートルもあるのかョ……」

Ｘは愚痴をこぼした。

Ｆは速く速く登っている。

ＸとＺはとてもじゃないがついていけない。

「もうちょっと速度落とせよ」

Ｘは文句を言った。

「ちゃんと鍛えたんだから大丈夫だ」

Ｆはまだまだ歩いていく。

「昼食もとらないのか？」

Ｚは聞いた。

「今１２時過ぎだけど」

Ｚは補足した。

「疲れてから食べたほうがいいだろ。それに、今こんなとこで食え

ねえぞ。もうちょっとぐらい待てよ。１２時半には食べよう」
Ｆは返答した。

１２時半。
ＸとＺ、Ｆは休憩できそうなところに腰を下ろした。
Ｘは昼食をリュックサックから出した。
Ｆは基本腕白だから、本当は食べたくてうずうずしていたらしい。
弁当箱を開けたとたんに、すごいスピードで食べ始めた。
「もうちょっとよく噛めよ」
Ｚがあきれて言った。
「時間の無駄。お前らも早く食え」
Ｆはしっかりした声で返した。

２０分後。
Ｘは弁当箱をしまうと、立ち上がった。
Ｆはもうウォームアップを済ませていて、ＸとＺを待っていた。
二人は軽く体操をして、Ｆのもとに駆け寄った。
「行こうか」
Ｆは言った。
が。
二人の視界から、突然Ｆが消えた。
「うわあああああ！」
Ｆは落ちた。彼らのいたところは岩がせり出しているところで、
その石が抜けたのだ。
「痛え」
Ｆはこぼした。
ＸとＺは駆け寄ろうとした。
しかし……。

ドォン。

という音とともに、木が倒れてきた。幸い、あまり大きくなかったため、三人は無事だった。
「これから先、こんなことがたくさん起きるんだな」
Ｆを引き上げてから、Ｚは言った。
彼らはつくづく実感していた。
自然は怖いものだ。
決して油断してはいけないと。

猛威（後書き）

次はどうしようかと思っています。なかなか次のこと考えながら書くのって難しいですね。

山頂（前書き）

三回目です。
今日も彼らの登山は続きます。

山頂

さっきの出来事に驚きつつも、X（エックス）、F（ロボット）、Z（ズット）は山を登っていた。いつだったか雨が降ったので、足を滑らせてこけそうに（何度も）なったが、見事なチームワークで着実に距離を稼ぐ（といってもそれほどの距離はなかったが）。

Xは重い足取りで登っていく。Fは考え事をしながら木の枝をつかんで登る。Zは携帯（GPS機能搭載のタブレット端末だ）の画面を見ながら登る。

「もう天気も悪いし、登りきったら車で帰らね？」

Zは提案した。

「車って誰の？」

とFは苦笑しながら聞いた。

「俺のさ。大学を一発で合格、進学、卒業までしたから、買ってもらった」

Zは自慢げに言う。

「金持ちはいいよなぁ」

Xは笑いながら言った。

「俺の叔父さんに車乗ってきてもらってさ、乗って帰ろ」

Zは続ける。

「叔父さんも一緒に、だよな」

もちろん、という返答を期待してFは聞いた。

「当たり前だろ」

Fはほっとした。たまにZは恐ろしいことを言うのだ。

彼らは赤いオープンカーの中、しゃべりながら帰った。深山の頂から望む絶景、底が一直線になった雲。

何をとっても美しかった。

Xは次の日、腰を痛めた。
腰痛は恐ろしかった。
次回のサブタイトルは”腰痛”だろう。

山頂（後書き）

ちょっと短めです。まあ息抜きで。
本当に次のサブタイトルは”腰痛”にしようかな……。

爆走

X（エックス）、F（ワオ）、Z（ズット）の三人は、車の免許を持ってはいた。しかし、運転は全然しておらず、みんなで練習することにした。

Xは、セダン車で、Fは軽トラに乗ってきた。

しかしZは、なんと前の車ではなく、ベンツでやってきた。

Xは唖然として、

「お前の家って、どんだけ金持ちなんだよ」

と言った。

Zは、

「ああ、まだ家にコルベットもポルシェもカマロも、ドゥカティにハーレーや特注デザインの車がある。まあ全然乗らねえんだけどな。ついでに、テニスコートにプールに……」

XとFはほとんど聞き流した。

「じゃあ、今からストリートレースをしよう」

Xは言った。

「はぁ！？　犯罪だろ！？」

Fが大声で怒鳴る。

しかしZは、

「大丈夫。ここら一帯は、全部俺ん家の土地」

Fは、すでにZの家に入っていることに気付いていなかった。

XとFは、車を選びに行ったZを待った。

「ベンツじゃねえのかよ」

Fは言った。

「ベンツで来なきゃ、ベンツは見せびらかしただけって話になるな」

Xも言った。

すると、二人の背後から『おい！』という声がして、振り向くと彼らの頭上を、一台のベンツが飛び越えていった。

Ｚはそのドアから身を乗り出し、
「早くやるぞ！　何モタモタしてんだ！」
と言った。
二人は、それにニヤニヤして答えると、スタート地点に車を止めた。
数分後、ベンツの上に座ってニヤけているＺの姿と、そのそばで車の運転の練習をしているＦとＸの姿があった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7931t/

MOUNTAIN

2011年11月2日21時01分発行